

令和7年度第2回教育課程編成委員会 議事録

【日 時】令和7年12月21日（日）10:00～11:30

【会 場】こころ医療福祉専門学校 3階 講堂

【委 員】出席：大木田治夫，志岐浩二，原田竜生，高比良宏輔，松永正司，森崎太一

藤原善行，高田一樹，田中のぞみ

大石勝規，谷口幸太郎，永田俊晴，高橋美如

欠席：瀬戸口勇二，川崎和幸

（敬称略）

1 理学療法科

<大石学科長>

（1） 臨床実習地受入調査について

前年度までに本会議で報告，指導いただいていた通り，実習カリキュラムの変更とともに受入調査を実施した。定員割れしている現状では，受け入れ人数としてはやや不足という程度であるが，離島などの宿泊を伴う施設も多く，学生の負担を鑑みると長崎市内，諫早市内での実習地の確保が継続した課題となる。実習施設確保については，電話連絡や施設訪問での依頼を丁寧に行い，調整を試みる。

また，調査方法について，施設より「電子媒体のアンケート方式」での調査を求める意見が得られた。既に多くの養成校が取り入れている様子であり，本校としても次年度に向けて調整する。

（2） 臨床実習地の学生配置について

受入調査の結果に左右されるが，できる限り学生の希望する分野（疾患領域や病期など）を配慮したいが，受け入れ状況や通学方法などを加味すると十分には対応は困難となる。学生にも都度，説明をしながら効果的な学びに繋がるよう指導を継続する。

（3） パラスポーツ概論等における外部授業について

当校理学療法科の一つの特色として，パラスポーツの普及や支援に力を入れ，共生社会の実現に向けた理学療法士に関われる可能性を実践的に教育に導入している。今後は，ボランティアの募集として学生の自主性に任せるだけでなく，均等に学びの機会を与えるために，授業コマへの振り替えも含めて検討していく。

（4） 新入学生を対象としたオリエンテーションについて

ICTを活用した教育における準備物としてタブレット等や，臨床実習開始前に対応することが望ましい各種の予防接種や感染症抗体検査など，金銭的な負担もかかるが理解と協力が不可欠となる。予防接種や観戦賞抗体検査については医療従事者として対

象者だけでなく自身や家族の生命や健康面に関わる重要な事象である。入学前より、丁寧に説明と同意、協力を得られるよう対応を検討する。

(5) 就職活動と理学療法士の働き方の魅力の発信について

早期より就職活動できるように、理学療法士の働き方について、積極的に外部からのリクルート活動での声を、学生の耳に届くように対面での職場説明なども受け入れていく。

<大木田委員>

(1) 臨床実習地受入調査について

臨床実習受入施設側の立場とすれば、業務負担や教育に要する時間のため収益にも影響している。実習施設を新規に増やすためには関係性は重要であり、卒業生が就職した施設などに挨拶に行くなどの対応で関係性を構築する案を提供いただいた。

年度ごとの承諾書の削除や調査票の電子化については、受入施設側の負担軽減のためにも承認する。

(2) 臨床実習地の学生配置について

学生の学習意欲の高揚のため、実習受入施設の充実化とともに、可能な限り配慮すること。

特に小児施設の実習施設など、人間発達や小児理学療法への関りについて学べる施設については、気になるところである。昨今、放課後デイなどの理学療法士の転職の機会も増えている。学生への情報提供も必要であると考えます。

(3) パラスポーツ概論等における外部授業について

休日に学生をボランティアで招集することにも労力が必要となり、学生の権利を守る視点、均等に学びの機会を与えるという考え方からも推奨する。

(4) 新入学生を対象としたオリエンテーションについて

保護者側の意見としては、目的の共有とともに、金銭的な負担を強いることに対する説明を求めていると感じる。適切な時期に丁寧な対応が必要となる。

(5) 就職活動と理学療法士の働き方の魅力の発信について

県内の施設との連携も強化していくと就職活動にも効果的であると感じる。

<志岐委員>

(1) 臨床実習地受入調査について

他養成校の依頼状況を鑑みても、実習施設との書面等での対応の簡略化や電子化については、負担軽減のためにも推奨する。注意点としては、施設長に対する依頼文書等については、受入施設としても必要書類であるため、継続して丁寧に対応すること。

(2) 臨床実習地の学生配置について

臨床実習施設の確保については、求人票のある施設や卒業生の入職している施設な

どから、県外を含めて再検討することを提案いただいた。特に、県外に送り出せる学生においては、一定の信頼のおける学生が対象となることになり、学習意欲の高揚にも繋がり、良い機会になるのではないかと考える。

(3) パラスポーツ概論等における外部授業について

他の養成校が積極的に行えていないことでもあり、理学療法士の地域・社会貢献の可能性を拡大する分野であり、卒後の活躍も視野に継続して欲しい。学生に均等な機会を与えるためのボランティアの授業コマへの振り替えについては承認する。

(4) 新入学生を対象としたオリエンテーションについて

保護者対応については丁寧な対応が必要であるため検討すること。

ICTの活用は臨床の現場でも課題となるが、リテラシーとともに、適切な文章作成能力についても教育的な指導してもらえると良い。昨今の SNS などでの軽薄や情報交換が社会人としての礼節に欠ける要素があり指導することも多い。また、機会は減少しているとはいえ、書字する際の丁寧な配慮についても教育してもらえると良いと感じる。

(5) 就職活動と理学療法士の働き方の魅力の発信について

学生の選択肢を増やせる機会となるよう、継続した関わりが必要と感じる。

<大石学科長>

放課後デイサービスについては、学科に寄せられる求人でも多く確認されるようになっている。当方としても、医療機関等で理学療法士を数年経験した者が転職先として検討するものという認識があり、事実、求人が多いことに対する教育体制が不足する面がある。放課後デイサービスや、介護保険分野のデイサービスへの求人に対する学生の不安を解消して、働き方の選択肢を拡大するためにも教育内容に取り入れることができるよう課題とする。

臨床実習地の確保については、卒業生との関りを強化する目的としても、卒業生が従事する施設との関係性は重要であることへの認識を再確認した。そして県外を含めた臨床実習先の検討が、卒業生との関係性の継続や、学生の学びの高揚、就職先としての選択肢の拡大に繋がる可能性を含めて、今後の検討課題としたい。

2 介護福祉科

<谷口学科長>

(1) 前回の議題について

・「国語表現」について

これまでの委員からの御意見も参考に、別紙のとおり、新しいシラバス案を作成した。主な変更点は次のとおりである。

- 全体的に広く浅く学ぶ傾向にあった内容を、主に書く力と読む力の養成に焦点を絞った。
- 講義や単発の演習をするだけでなく、基本的に毎回の授業で反復練習となるような演習を行う。(詳細な演習内容や方法等は要検討)
- 良い文章とはどのようなものかをインプットするため、模範的な文章(過去の学生の実習記録など)を読む機会も複数回設ける。
- 在校中の実習記録や、卒業後の業務記録等を書くことへの能力向上に資するよう、その日の授業の記録を書いたり、実際の実習課題の作成練習をするなど、実践の場面に直結する内容も取り入れる。
- メディアリテラシーについての内容を1コマ追加。(計2コマ)
各コマの詳細な授業内容は今後検討していくが、現時点で本案に対する御意見を伺いたい。

(2) 卒業研修について

前回の協議では、知識や技術の研鑽のための勉強会とするのも良いが、参加者同士の意見交換や情報共有の場として開催することも有意義なのではないかという御意見をいただいた。県内の多くの施設で卒業生が就労している本校ならではの取り組みとして発案いただいたものである。これを受け、今年度はこの意見交換会として開催する方針としたい。参加対象者については、日本人と留学生を区別せず呼びかける予定である。

意見交換のテーマ候補としては、委員からの御提案もあった「現場での成功談や失敗談」「学校の勉強と現場の違い」をはじめ、「自分たちの職場での有意義な取り組み」などが、学科内で挙がっている。

開催時期は、1月下旬の国家試験や2月中旬～3月中旬の第2段階実習などのスケジュールを鑑み、例年どおりであれば3月中旬から下旬の開催となる。また別の案として、在校生の参加も考慮し、第2段階実習の中間点(2月最終週)に設けている帰校日(実習期間の中ほどの時期に、実習生全員が学校に集合して、中間時点までの振り返りなどを行う日)に合わせて開催することも検討している。この場合、本来の趣旨である卒業生の研修となるだけでなく、在校生にとっても、平素の授業では経験できない貴重な学びの機会となり得ると考えている。

(3) その他

日本人入学者の数が年々減少している。令和6年度は10名、令和7年度は13名であり、令和8年度も同じ水準程度になると見込まれる。

原田委員には介護福祉士会として、例えば本校のオープンキャンパスなどの場で「介護の魅力伝道師」と連携を検討していただくことは可能か伺いたい。

＜高比良委員＞

（１）前回の議題について

・「国語表現」について

これまで実習生を受け入れてきた経験などから、毎日の記録や課題を「書く」ことに苦勞している者が非常に多いと感じている。書くことが減少している中で、書くことが当たり前のことと感じることができれば、実習時などの本来の学習目的により集中できるのではないかと。また、書く能力を養成した先に、話の要点となるキーワードを的確に捉えて、迅速にメモを取れるような実践力が身につくことも期待したい。学校でもいろんな取り組みをしていただいているが、「何を書けばいいかわからない」というのがあると思う。意味を理解してもらおうということが必要だと思う。

また、毎回の授業の最後に振り返りや記録を書いてもらい、書く癖をつけさせることは良い取り組みだと思う。これを実施するにあたっては、何を書かせるか、書いた後のフィードバックをどうするか、といった点に検討が必要である。

書く内容については、フリーで振り返りを書かせるよりも、例えば「今回学んだこと」「質問したいこと」など、2つ～3つほどのテーマを設けた方が、より具体的に考察して書きやすいのではないかと。

また、フィードバックの方法について考えたとき、書かせっ放しでは、実践力につながるような十分な成果は期待できない。毎回添削等をして次回授業時に総評をする方法もあるが、学生数が多ければ講師の負担も大きい。良く書けているものを抽出し、次回授業時に発表させる方法も考えられる。

また、模範となる文章を読ませる取り組みも、まずはインプットして、書く力を養成する土台とするという点で評価できる。ただし、ただ読ませるだけでは大きな効果は見込めないで、筆者はなぜそこに着目したのか、どういう意図で書いたのかなど、内容を理解して説明できる水準まで引き上げる必要がある。この点を講師がティーチングする方法もあるが、安直に答えを教えるのではなく、考察を促しアウトプットさせることも有効だろう。

（２）卒後研修について

昨年度のテーマが看取りであったが、看取りを行わない施設の職員の場合は参加の動機付けが難しい。テーマが限定されるとこのような制約が生じるが、この研修を意見交換や情報共有の場とすることによって、施設の立場から見て、職員を送り出しやすくなると感じる。各卒業生に個別で案内をすると高い参加率は望めないと思うので、引き続き所属施設宛にも案内を出し、施設から参加を後押ししてもらおうと良い。

養成校を卒業後、就労を始めてからは、自身の職場以外の事業所の情報に触れる機会はかなり限定される。他の事業所の良さを知ることが、ひいては自身の職場の良さに対

する気づきや再認識につながる可能性もある。

議題に挙げられたテーマ候補のうち、「自分たちの職場の有意義な取り組み」については、感染対策や福利厚生など、話せる内容は多岐にわたる。赤裸々に処遇面の話や有給休暇取得率の話などをすることも考えられる。懸念点として、施設によっては「あまり施設の情報を漏らさないでほしい」「〇〇のことは外部に話さないでほしい」などの思いがあるかもしれない。愚痴をいう集まりになってはいけない。同窓の仲間で集まり話をして施設に帰ってくると、明日からも頑張ろうという活力になると思う。施設が参加させたいと思えるテーマを検討する必要がある。卒業生や施設に、希望するテーマのアンケートを取れると良いのではないか。

開催時期について、在校生の参加も検討することには意味がある。テーマ候補の一つである「学校の勉強と現場の違い」は、在校生にこそ聞いてほしい内容だろう。在校生を参加させるにあたっては、テーマを検討する際、卒業生にとっての学びやある意味での息抜きと、在校生への教育効果の両方のバランスを考慮する必要がある。同窓会の性格も持ち合わせる場になるので、開催方法については様々な検討要素がある。

(3) その他

AIの活用についても考える必要がある。AIは便利で現場でも活用しているが、職員が研修に行き、報告書を提出した際に、あきらかにAIで作ったというのは見て分かる。良いものではあるが、理解してAIを使用しないと成長に繋がらないと思う。「メディアリテラシー」を勉強する中で学生に伝えてほしい。

<谷口学科長>

(1) 前回の議題について

・「国語表現」について

「書く」機会が減少については今の学生の生活の中で実際に起きていることである。高比良委員から意見があったように記録で苦戦し、実習が嫌になる1つというのは学生からも話がある。本来、実習自体を楽しんでもらって、それぞれの職業の良いところを感じてもらいたいと思う。記録によって実習に行くことが苦にならないよう、書き方を実習に送り出す前に教えていかないと、これからの学生は実習で勉強する以前にドロップアウトしてしまう可能性がある。いただいた意見をもとに、「書く」「読む」を中心に内容を構築し、次年度の委員会で進捗や効果を報告させていただく。

(2) 卒後研修について

卒業した学生を主体として卒後研修を行っていきたいと考えている。学科としてテーマを「自分たちの職場の有意義な取り組み」と検討していたが、言える内容、言わないでほしい内容が施設によってはあるだろうとの意見をいただいたので、参加する卒業生にこちらからある程度テーマを提示し発表してもらうことを考えている。愚痴をいう集

まりにならないよう開催をしていきたい。

＜原田委員＞

（１）前回の議題について

・「国語表現」について

記録の様式の見直しも場合によっては必要になってくるのではないかと。易しくするというのではなく、既存で使っているものが学生にとってきちんと理解できているのか見直すポイントになってくるのではないかと。

長崎県では、介護現場のデジタル改革推進事業として、ICTの活用をすすめている。記録に関しては「書く」ことはもちろん大事ではあるが、音声で入力する記録ソフトを導入している施設も増えている。「話す」という点での苦勞もあり、外国人に限定すると独特な発音が認識しないという問題がある。そういう一面からいうと、事業所は限定されるが、「書く」「読む」だけでなく、「話す」というところも必要という意見もあると思う。ただ、「書く」やタブレットなどで「打つ」というのがメインになってはいると思うので、「書く」「読む」にフォーカスをあてるのは、非常にいいことだと思う。

（２）卒後研修について

卒業後の研修の取り組みは良いことだと思うし、卒業生と在校生の接点を設けるといふところは、率直に取り組んでいいと思う。ただ、現場同士が集まってすごくいいことばかりが語られるかというところ、そうでもないと思う。現状、よりよい取り組みをされている施設もあれば、正直なところ、昔の流れのままの施設があるのも事実だと思う。

外部のセミナーなどに参加させていただいた際にも、なかなか卒業生同士がつながるといふ機会は少ないと思う。どの程度卒業生が参加するか分からないが、双方にテーマを設けて、お互いのことを知るのも大事である。

また、これからを考えることも必要だと思う。理想を持って入ったけど、その理想に対してうまくいっていないこともあると思う。理想に対してどのくらい上手くいっていて、または上手くいっていないか、それがどんな理由なのかというのを、在校生が聞くのも勉強になるのではないかと。

（３）その他

平成30年から長崎県の長寿社会課とともに介護の仕事の魅力を発信しようということで「介護の魅力伝道師」という取り組みを行っている。

介護福祉士会としても、会員数の減少が徐々に起きており、これは全国でも同様である。もちろん介護福祉士会としてやらないといけないことはあるが、もう一方で介護福祉士会が頑張ったところという部分もある。先日、別の養成校の先生と話した際、そもそも学生が養成校に入ってこないことには難しいという話になった。

介護福祉士会としては、これからいろんなところでどんどん出ていく必要があると考えていて、我々としても介護福祉士を魅力的に伝えたいし、そもそも学校に入ってくる学生にもスポットを当てたいと思う。伝道師の派遣ももちろんだが、例えば学校の授業の1コマを、認知症ケアを専門的に行っている人に講義をしてもらうなど、現場志向の意見や話は学生に響くのではないかと考えている。

<谷口学科長>

(1) 前回の議題について

・「国語表現」について

現在、介護福祉科に所属している教員は現場を離れて年数が経過しており、音声入力で記録するというイメージがあまりなかった。外国人はやはり独特な話し方やイントネーションがあるので、音声ではなかなか拾われにくいという課題はあると思う。

来年度の「国語表現」については「書く」「読む」を中心に構築していくが、「話す」についてはコミュニケーションの授業もあるので、そちらで対応を検討していきたい。

(2) 卒後研修について

計画を立てている段階ではあるが、最終的にどのような形式で、どのくらいの参加人数、参加した卒業生からの意見等については、次年度改めて報告させていただく。

また、在校生の参加についてもできるだけ多くの在校生が参加できるタイミングで開催を考えている。

(3) その他

「介護の魅力伝道師」との連携については、職業意識の醸成にもつながっていくと思う。オープンキャンパスなどの広報的な部分ももちろんだが、学校の授業の1コマとして外部から講師に来ていただいて専門的な話を聞くというのは学生にとっても有益であると思うので、次年度に向けて前向きに検討させていただきたい。

3 柔道整復科

<永田学科長>

共通報告

1 第1回の提案への取組み

(1) 国試対策の家庭学習の実施

- 10年分の国家試験過去問題の自宅学習と報告を義務付けて行った
模擬試験のやり直しレポートの提出を義務付けて行った

(2) 国試専門予備校などの講師の招聘

- 都合により未実施であったため、次年度も検討していく

(3) 勉強方法のマニュアル化

- 模擬試験の解答後の問題活用方法の講義を行った
国家試験合格に必要な知識をまとめた単語帳を配布した

(4) 臨床実習に対して目的の明確化とマニュアルの作成

- 担当者と講義し次年度から実施予定

2 分科会議題

(ア) 卒後教育について

(イ) 入学前教育について

<松永委員>

(ア) 卒後教育について

卒業生(0B)に対しての研修・教育は、知識・技術の向上や仲間との情報交換の場として、必要不可欠なものとする。また、学校との繋がりを継続することで、志願する学生の紹介や応援が増えてくるとも思料され、今後の取組みを頑張ってもらいたい。学校に対しての課題としては、

- 卒業生の組織作り(同窓会の設立)をして、情報が行き届くシステムを構築してはどうか?

私が実際にこころ医療の0Bに聞いたことがあるが、卒後教育の存在を知らない人もいた。

- 講師を0Bのみならず、医師やプロの専門職の方を招いての“魅力ある勉強会”を開催するのはどうか?(有料での開催でも良いのではないか)

※参加率が低い要因として、「研修内容が既にあるもの(研修を受けても意味がない)」

ことや、「卒業生(0B)へのアナウンス不足(開催自体知らない)」があると思われる。

- 卒業生の近況や情報交換の場として、懇親会も含め開催をしてはどうか?

○開催場所は、県内外からも集まりやすいよう利便性の良い所や、興味のある魅力的な会場で

開催するのも良いのでは?

○参加してもらった卒業生が次も参加してもらえるように内容の希望調査をしてみてもは?

(イ) 入学前教育について

柔道整復師のみならず、医療人としての基本は“解剖(骨と筋肉)”の理解が不可欠、従来通りの方法で入学前の勉強を継続して行くのが良いと思う。それプラス、過去の入学生

が壁に当たる科目や疑問など、過去のデータ（経験）をもとに共有することは、退学者の抑制や授業へのスムーズな移行に効果があるのではと考える。

○教材を送る以外に、ホームページ上に学習で詰まりやすい点、学校生活の魅力などの情報発信を行ってはどうか？

○実際に在校生に入学前教育の感想を聴きとり反映させてみてはどうか？

<永田学科長>

(ア) 卒後教育について

私の就任前の卒業生には連絡が取りにくい状況であるので、卒業生への案内がもっと周知できるように赤島と協力していきたい。開催場所についても本校実施でこだわる必要はないため集まりやすい場所での開催も検討していく。

(イ) 入学前教育について

実際に学生へ聞き取りを開始している。その声を今年度からでも配布資料の中に同封して入学前の不安を取り除く一助にしていきたい。

<瀬戸口委員>

本日、瀬戸口委員は欠席のため、永田から分科会の内容を紹介する。

(ア) 卒後教育について

手技に関しては勤め先の特色や考え方があると思うので、具体的な施術方法を研修内容にするのではなく、根本である視診・触診・検査法などどの整骨院でも必須である診察力を身に着られるような内容や、レッドフラッグを見分けられるような内容をする方が就職先の特色に関わらず参加者が集まりやすいと思う。他にも医接連携の取り方や、整形外科との繋がりを持てるような内容にすることで、興味を持った参加者が増えるとも考えられる。

また、募集方法として卒業生個人に連絡をするのではなく、上司や社長に開催案内を送るのもいいのではないか。個人では参加を見送る人や都合がつかない人も出てくるが、会社として参加する、となれば数名での参加や勤務の一環として参加を促す流れになる企業もあると考えられると御意見をいただいている。

(イ) 入学前教育について

入学前に学校で習う基礎を教えるのもいいとは思いますが、課題を送っても取り組まない高校生も少なからずいると考えられる。入学してしまえば必ず触れることになるため、内容は基礎のままでもよいが回数も1、2回程度で十分だと思う。それよりも課題を行うことでプレッシャーを与えてしまい、モチベーションの低下になるのではないかと懸念する。課題よりも事前交流会などを行い、授業の雰囲気、教員と生徒・上級生と下級生同士の距

離感などを肌で感じさせて、入学後のイメージ化を図るようにした方がより効果的な入学前指導になるのではないかとと思うと御意見をいただいている。

<永田学科長>

(ア) 卒後教育について

企業と学校のつながりを作れるように、開催案内は個人のみではなく、企業にも案内を周知していく。

(イ) 入学前教育について

今年度の入学前交流会から現1年生が主体とした新入生交流会を開催し、上級生との関りを入学前から作ることにより、入学後のイメージ化やモチベーションアップにつなげていきたい。

4 鍼灸科

ア 卒後研修について

(高橋) 本日、川崎委員は欠席のため、分科会の内容を紹介する。

9月21日の卒後研修に川崎先生と治療院スタッフに参加いただいた。全体の参加者は22名だった。鍼灸とカイロプラクティックの内容で、体全体のバランスみる視点を勉強できてよかった、今後もこのような卒後研修を続けてほしいというご意見だった。

イ 経営の勉強について

(高橋) 学校では経営学の授業はないのかというご質問があった。「今は治療院や整形外科が増えたので、開業するのは大変だろう。基本的にはちゃんと治療できるようになることがいいと思っているが、付加価値をつけてまずは患者さんに来てもらうことが大事だと思う。」というご意見をいただいた。

以前は3年時に、開業のための事業計画を立てる授業をしていたが、しばらく行っていなかった。今年、2年生に行ってみたところ、立案に苦勞していたが、最終的には全員自分なりに考えたものを考え、発表できた。

学校では鍼灸施術の基礎ができるようになることを基本目標にしているが、今は鍼灸施術だけでは患者さんが来てくれるようになるとは限らない。まずは患者さんに来てもらう、そのためにはどんな工夫をするべきか考える時間を作っていきたい。

ウ 訪問鍼灸について

(高橋) 今、訪問鍼灸を専門にしている鍼灸院が増えている。その場合、療養費の請求書類を本人が作成せず、費用がいくらで請求されているかを把握していないことがあるようで、川崎先生はそれを非常に心配されていた。「自分の施術が実際にいくらになっているのかをちゃんと知ることは経営面で大事である。特に将来開業するつもりであれば、自分でわかっていないといけない。」と言われていた。委託業務での請け負いについても、今後も先生方や業界の方々と情報交換をして学生に還元をしていきたい。

また、現在学校では、鍼灸の療養費請求については長崎鍼灸師会の森崎先生に特別授業の中で触れていただいている。ただ、3年時の1回のみなので学生が本当に理解するまでには至っていない。今後、療養費の適切な請求については、他の授業でも取り上げるなど、対応していきたい。

エ 触診授業について

(高橋) 森崎先生とは触診の重要性について再々話し合ってきたが、今年から1年生の解剖の授業に骨・筋を触る触診も組み込ませている。座学中心から、座学プラス触診を入れることで集中力の持続にもつながっている。後期になり灸実技で背部触診を開始したが、すでに肩甲骨や脊椎・腸骨の触診をしているので、背部の取穴がとともスムーズに行え、繰り返し触診をすることの効果を実感している。

(森崎) 自分の母校では3年時に教員に刺鍼をする実技試験があった。教員に刺鍼することは緊張感があっていいと思う。そのプレッシャーを経験しているほうが卒業後に鍼灸師としてやっていけるのではないかと思うが、現在は難しいとのことだった。

確かに、知人の高校教員が「実技で機械の使い方の説明をして、使い方を見せても伝わっていないことがあり、危険で学生にさせることができないことがある」と言っていた。数年前までは1回説明すればできていたが、今は1回説明を聞いて頭の中に入れてすぐ表現することが難しい学生がいるそうである。そうすると、我々の仕事は知識を得て表現する職業で、学んだことを出して表現して治療する仕事なので、対策をしないとイケないと思うが難しいだろうなと感じた。

(高橋) 刺鍼技術の習得にはとても個人差があり、本人がどのくらい「上達したい」という意欲を持っているかで習得度はかなり異なってくる。また「説明を聞いて見て真似る」ということが苦手な学生がいるため、まずは安全に痛くなく、灸なら目的外の火傷をさせない方法を繰り返し練習することに時間をさいている。大きなプレッシャーをかけたうえで評価するまでには至れない状況である。鍼を刺したり灸で火を使うことは監督をしておかないと事故が起

こるので、目を離さずかなり慎重に対応をしている。

現在は、卒前にできるだけ臨床に近い経験を踏んでおくために、段階的な方法で実技の評価で行っている。

デモンストレーションで何回も見せることで、次第に真似ることができるようになるので、大事な基本的なことはできるだけ繰り返し行っている。ただ、そうすると進行が滞ってくるので、何をどのくらい繰り返すのかが重要になってくる。

オ 卒業生の国家試験受験について

(森崎) 去年、国試を残念ながら不合格となった学生は、またチャレンジするのか。

(高橋) 再受験する卒業生はいる。卒業して翌年に再受験する卒業生は多い。

(森崎) 学校で勉強できたりはするのか。

(高橋) 授業の聴講ができる。費用がかかるが、自分で科目を選んで聴講できる。年によって異なり、3年前は聴講生がいた。

他には模擬試験の相談を受けたりするので、無料のものや有料のものを伝えている。

6 閉会の挨拶

<藤原校長>

世の中の変化に伴い、学生も大いに変わってきている。年々学生に言わなければならないことが多くなっていると感じている。

入試で絞られる高校とは異なり、専門学校では年によって入ってくる学生の質に大きな影響がある。質を確保できない以上、去年のやり方で今年が対応できるという訳ではない難しさを感じている。

教師の生徒との関わり方も変化しているが、国家試験という目標がある以上、教育の質を落とすわけにはいかない。今年度の残りについては生徒募集、国家試験ともよい流れになっているので、年度終わりの詰めをしっかりとできるよう冬休み中の学習課題・指導および1月からの指導を徹底し、学生たちに悔いのない努力をさせたいと思っている。

この委員会を会議のための会議に終わらせないよう、外部委員の色々なノウハウ、思い、あるいは業界の流れをしっかりと吸収させてもらい、実質的な実践につなぐ会にしたい。多くの意見を拝聴しながら、次年度の計画につなげるため、内容を勝手ながら少し変更させていただいたことをお許し願いたく思う。

委員の皆様、1年間ありがとうございました。